

出産の社会史における二つの近代

——家族変動論のひとつの試み——

落合恵美子

「出産」はまぎれもなくひとつの社会現象である。本稿は社会史、家族史、歴史人口学などの新しいアプローチを用いて近代化過程における「出産」の歴史的変化を明らかにし、社会構造内における「出産」の位置の理論化をめざすものである。結論として「出産」に着目した場合「近代」は二つの局面からなること、及びこれらの局面のもつ社会学的含意が明らかにされる。結論は家族変動論へのひとつの寄与ともなっている。

序 「出産」研究の萌芽と現代社会

「出産」が社会科学の対象として扱われることは従来ほとんどと言ってよいほど無かった。その理由としては第一に生物学的現象であって社会科学の対象ではないように思われた、第二に主に女性の経験とされ大多数が男性である研究者が重要性を認識できなかった、などが挙げられよう。しかし人間活動の大半は生物学的でもあるし「出産」も両性の関与なしには成り立たないことをひとたび思い起こせば、出産のみがことさらにそうした扱いを受けてきた背景にはより根深い要因がひそんでいるように思われる。例えばわれわれの棲む近代社会の構造そのものが「出産」の社会性を隠蔽し社会科学的知から覆い隠しているとでもいうように。

ところが1960～70年代になって「出産」の社会科学研究がわずかながら芽吹いてきた。ひとつの芽は言わば第一の要因に抗して生、死、性など「生物学に属していると同時に心性(mentalité)⁽¹⁾にも属し、自然に属すとともに文化に属してもいる」(Ariès〔1960a=1980: i〕)現象をすすんで主題とする社会史(social history)⁽²⁾である。特にその一分枝である家族

史やその母胎となった歴史人口学では「出産」に関する研究蓄積が破竹の勢いで進んでいる。もうひとつの芽は第二の要因に抗していわゆる「女性固有」の経験に照明を当てる女性学(women's studies)である。なかでも医学史、医療人類学の両分野の発展はめざましく「ラマーズ法」に代表される自然出産運動などの近代医療批判の理論的支柱ともなっている。この時期に出産に対する知的ならびに実践的関心が急速に昂まってきたことは偶然と言うよりおそらくそれ自体ひとつの社会現象として見るべきなのだろう。時を同じくして女性、子供、老人問題を含めた家族の危機、生活領域の危機が声高に警告されるようになったことも考え合わせると、あるいはこうした領域の全体を看過させがちであった社会構造がどれほどの深さからかともかく転換しようとしているのかもしれない。

本研究はこうした時代の「心性」を分有する者として「出産」をひとつの社会現象ととらえ、近代における「出産」の社会史的变化の過程の検討を通じて社会構造における「出産」の位置の理論化をめざすものである。着眼の焦点は「出産(childbirth)」それ自体に置くが、「出産」はその前提である「性交」「妊娠」やその人為

的中断である「出生抑制(birth control)」あるいは産後の「産褥(puerperium)」や授乳など最小限の「育児」などとも切り離し難い。そこで行論の必要に応じて上記の諸現象を含む「再生産(reproduction)」すなわち「人間が子を産む過程に関わる諸活動の総体」にまで言及の範囲を拡げることもあるだろう。また「出産」は家族などの領域と深い関連をもっているため本稿は近代化過程における家族変動論に新しい視点からの何らかの知見をつけ加えることもできるのではなかろうか。ただし以上のような課題を十全に展開するには本稿に許された紙数はあまりに限られている。そこで本稿では今後いくつかに分けて詳論する際の指針となる全体的見取り図を示すことを主たる目的としたい。また本研究の課題は最終的には日本や第三世界を含めた「世界社会(global society)」を視野に収めることを要請すると思われるが、本稿では最初の作業として「近代化(modernization)」を扱う論考が良かれ悪しかれその基盤を置いてきた欧米圏を中心に論じていくことにしたい。

I 近代的出生抑制の二類型とその展開 — 歴史人口学から —

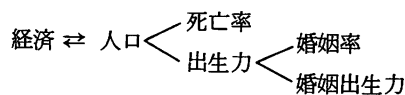
近代的出産の人口学的特徴

最初に社会史や家族史のひとつの母胎である歴史人口学の出産に関する成果を展望しておこう。歴史人口学はそのデータと方法の性質から精度の高い成果を地理的にも時間的にも比較的広範囲について蓄積してきており、いかなる種類の社会史や家族史を志すにせよ決して外すことのできない解釈の共通の土台を提供しているからである。

歴史人口学及びその源泉である人口学では①人口を経済との関連で考察する、②人口を死亡

率と出生力に分解して考察する、③出生力を婚姻率と婚姻出生力に分解して考察する；出生力 \equiv 婚姻率 \times 婚姻出生力(婚姻外出生力が十分小さい場合)、という概念枠組をもっている(図1)。ここでは出産は集合的に「出生力(fertility, fecundité)」として表わされているのは言うまでもない。近代の人口学的特徴は、産業化と相前後しての高出生率・高死亡率から低出生率・低死亡率への移行、及び死亡率低下が出生率低下に先行することから生じる人口増加として古典的にはとらえられてきた。これを「人口転換(demographic transition)論」と呼ぶ。出産すなわちここでは出生力に着目するとその長期的かつ不可逆的低下(出生力転換)が近代の特徴ということになるが、この過程はより詳細にはどのように概念化できるのだろうか。さらに婚姻出生力と婚姻率に分けてその後の研究の進展を整理しておこう。

図1 人口学の概念枠組



婚姻出生力についての古典的人口転換論による解説は、転換前には何の抑制もなくほぼ生物学的限界に達していた出生力水準が近代になり避妊法が導入されることにより低下したとするものであった。しかしその後の実証研究により転換前の人口にも意図的(避妊、墮胎、嬰兒殺しなど)あるいは無意図的(性交頻度、授乳期間など)についての慣習)な出生抑制が存在し婚姻出生力の水準もさまざまだったことが次第に明らかになってきた。では婚姻出生力抑制の面から近代的出産の特徴を指摘するのは不可能なのだろうか。

この問いに対するひとつの解答は1960年に

国立人口学研究所 (INED) 紀要の特集「家族における出生の予防——その近代における起源」(INED〔1960〕)として一応の総括を得たフランスの避妊研究から提出された。転換前には売春や婚外性交などの「もぐりの、人目をはばかる性的関係」(Ariès〔1960b=1983:74〕)に限られていた出生抑制が正式の婚姻に大規模に侵入してきたのが近代の特徴だとするのである。この解答はヨーロッパについてはほぼ妥当するようだ。

しかし他地域についての人類学的事例を見れば婚姻内における出生抑制は必ずしも近代欧米に限定されてはいないことがわかる。そこでもうひとつのより精確な解答が必要とされる。アンリ(L. Henry)により提唱されコール(A. J. Coale)やノデル(J. Knodel)らプリンストン大学のグループにより活用されている「自然出生力(natural fertility)」概念がそれである。出生力転換前の人口に見られる「自然出生力」とは「子供の数を制限しようとする意識的努力がなされない婚姻出生力」で、その逆が転換後の人口に見られる「抑制出生力(controlled fertility)」である。「産児数(parity)に依存した出生抑制」である「家族規模制限(family limitation)」が行なわれるのが「抑制出生力」だと言いかえてもよい(Henry〔1961〕, Knodel〔1978〕)。留意すべきなのは「自然出生力」には慣習による無意図的抑制や出生間隔

を調節する婚姻内の意図的抑制も含まれる点である(図2)。年齢別婚姻出生力のグラフ(図3)を描いてみればこれらの概念の意味するところは一目瞭然だ。夫婦が目標となる子供数という観念をもちそれに達したら以後は子供を作らないのが転換後の出生抑制なのだ。以上より近代的出産の婚姻出生力から見た特徴は「婚姻内で家族規模制限型の出生抑制が広く行なわれるようになることによって婚姻出生力が長期的かつ不可逆的に低下したこと」とまとめることができよう。

一方婚姻率に着目すると出生力転換以前から近代欧米に固有の特徴を見出すことができる。マルサス(T. Malthus)の指摘を受けてハイナル(J. Hajnal)が定式化した「ヨーロッパ的婚姻パターン(European Marriage Pattern)」

図3 自然出生力と抑制出生力の例 (Henry〔1972〕より)

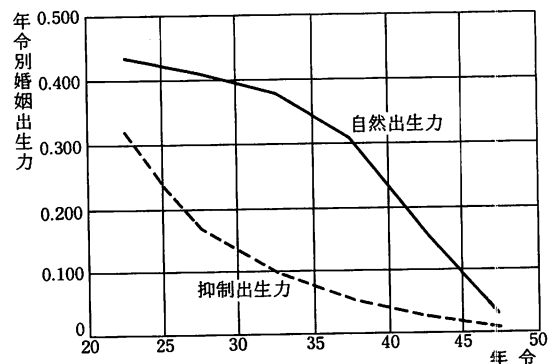
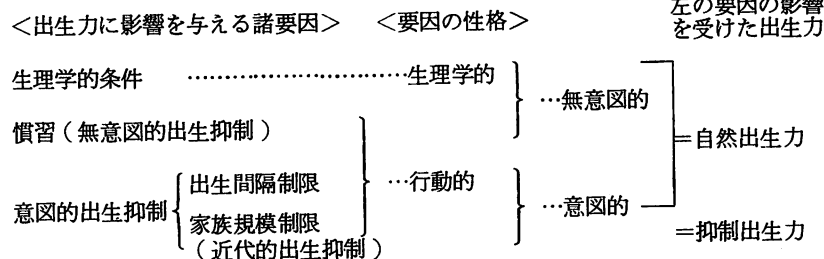


図2 出生力に影響を与える諸要因



がそれである (Hajnal [1965])。その特徴は晩婚 (婚姻年齢が高い)・稀婚 (生涯未婚率が高い)であり当然低婚姻率, 低出生率を帰結する。事実西欧では人口転換以前から他の早婚・皆婚地域に比べ低水準の出生率を示していたことが知られている。

以上より近代 (欧米) における出産は歴史人口学的には二類型の出生抑制すなわち「ヨーロッパ的婚姻パターン」により社会的に規制する婚姻率抑制と「家族規模制限」により家族が媒介となって意図的に抑制する婚姻出生力抑制によって特徴づけられていると言うことができよう (図4)。

二類型の出生抑制の歴史的展開

ではこれら二類型の出生抑制は歴史的・地理的及び階層的にはいかなる具体的展開を示したのだろうか。この問題についてはさまざまな地域, さまざまな時代についての膨大な量の実証研究が積み重ねられてきたが, 管見の及ぶ限りで整理してみたのが図5である。

まずヨーロッパ的婚姻パターンの始期は必ずしも明らかとは言えないがイングランド (Smith

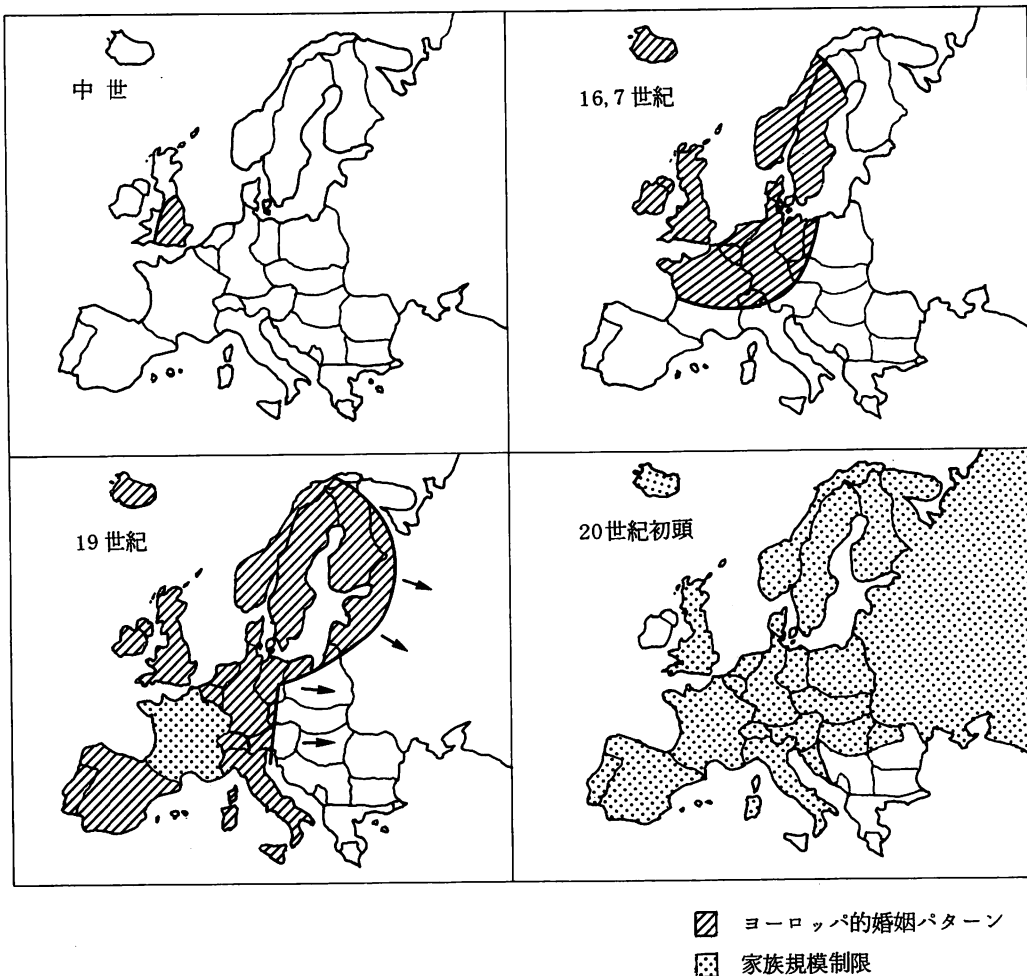
[1979])などわずかな例外を除いては16, 7世紀の北西欧 (アイスランドを含みフィンランドを除くスカンジナビア諸国, イギリス諸島, ベネルクス三国, ドイツ語圏及び北フランス) に出現したとするのが現段階の一応の共通見解と考えていだろう。その後19世紀にはそれまで早婚だった南欧 (南フランス, イタリア), フィンランド, バルト諸国が同婚姻パターンの域内にはいって「レニングラードとトリエステを結ぶ線」 (Hajnal [1965]) が境界となり, さらに20世紀初頭には東欧及びロシアでも婚姻率低下のきざしが見えた (Hajnal [1965] [1982], Coale [1969] [1973] など)。階層的に見るとこの変化は一般民衆に典型的で, 貴族及び上流階層では変化の始期が遅れるかあるいは明確な変化を経験することはついに無かったようだ (Hollingsworth [1964])。

このようにして成立したヨーロッパ的婚姻パターンは1930~40年頃全地域でほぼ一斉に崩壊する。すなわち早婚・皆婚化して婚姻率が急上昇する。興味深いことには1870年頃からこれもほぼ一斉に婚姻出生力が低下し始めそれが一応底をついたのが1930~40年頃つまり婚姻

図4 出生抑制の諸類型

出生力 = 婚姻率 × 婚姻出生力		
出生抑制	婚姻率抑制	婚姻出生力抑制
社会的 慣習的	婚姻パターン 近代欧米では ヨーロッパ的婚姻パターン (晩婚稀婚)	慣習 (授乳など)
家族的 意図的	これまでの歴史では重要でない	意図的出生抑制 (避妊, 墮胎, 嬰兒殺, 棄児) 近代欧米では 家族規模制限

図5 近代的出生抑制の展開



率上昇の時期と一致するのだ (Coale [1969] [1973])。あたかも婚姻内への出生抑制の導入により婚姻への情熱が解き放たれたかのように。婚姻率抑制型出生抑制から婚姻出生力抑制型出生抑制への交替が行なわれたのである。

婚姻出生力の低下 (出生力転換) あるいは家族規模制限の普及という出生抑制の第二類型の展開は何よりもまずその変化が急激かつ一斉であったことに特徴づけられる。ヨーロッパ的婚姻パターンの展開が3~4世紀を要したのとは対照的だ。ただしフランスは例外で他の諸国にほぼ1世紀先んじてフランス革命とほぼ同時期の1770~80年頃からゆるやかな低下を開始し

ている (Gautier & Henry [1958], van de Walle [1974] など)。また他の諸国はわずかな数十年ほど (1870~1930・40年) の間に集中して低下を経験したのではあるが、その中のわずかな差を見れば北西欧、南欧、東欧・ロシアの順を見出すことができる (Coale [1969])。また階層的には貴族・上層ブルジョワジーなど上流階層が先行し次に中流階層、最後に労働者など下層へと普及したことが明らかだ (Wrigley [1981=1982] など)。

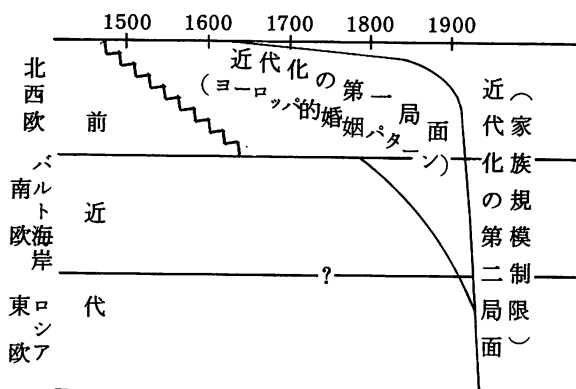
以上でごく簡略に再現してきた歴史的展開から、われわれは近代 (欧米) における出産は歴史人口学的に見れば異なる二つの型の出生抑制

に特徴づけられる二つの局面を経験してきたと結論することができます。それぞれの局面を経験する年代は地域や階層により異なる。地域的にはどちらの局面への変化においても

- ① 北西欧（米国を含む）
- ② 南欧及びバルト海岸（フィンランドを含む）
- ③ 東欧及びロシア

がそれぞれひとつのまとまりある地域としてほぼ運命を共有していることを考慮すれば、二つの局面は図6のように図示することもできよう。本節で近代的出生抑制の二類型への注目により見出された歴史人口学的二局面はそれぞれ何らかの社会学的意味をもっているのか、もっているとすれば何を含意しているのかを明らかにすること、それが次なる課題となろう。

図6 出産の社会史における二つの近代(1)
— 歴史人口学から —



II 出産をめぐる心性と社会関係の二局面

出産をめぐる社会学的側面についてはごく近年成果をうみ始めた出産に関する社会史的研究の他に女性学的志向に牽引された医学史及び医療人類学からも多くを知ることができる。われわれはこれら諸系統の研究から得られた資料を社会史的視角から、すなわち人々の日常生活の

細部に顕現する心性や社会関係⁽⁴⁾、社会構造を再構成するよう努めながら検討していくことにしたい。なお対象地域は欧米圏ではあるが資料の制約から特に西欧及び米国についての知見に依拠した言及が多くなることをあらかじめ断っておきたい。

近代化以前の出産

まず比較のため近代に向かう変化が生じる以前の出産を再現しておこう。もちろん厳密に何が出産の近代的变化であるかは本論考の結論として初めて得られるのであるしまた資料的制約もあり再現は多分に理念的な色彩を帯びざるをえない。

図7を見てみよう。出産のとき産婦は産室内で分娩椅子に腰を下ろしている。近代化以前の地域に広く行なわれた「坐産」だ。「坐産」は今日一般的な「仰臥位産」に比べて産婦がいきみやすい産婦本位の姿勢である。産婦のまわり

図7 近代化以前の出産：16世紀ドイツの例
(Donnison〔1977〕より)



には伝統的産婆と近隣及び親類の女性たちが集い各々の体験に基づいて口々に助言したり手助けしたりしている。折にふれて民俗宗教的なさまざまな儀礼や呪術が行なわれる。伝統的出産の理念的イメージはだいたいこのようなものであろう(Laget〔1982a〕〔1982b〕など)。産婆は社会的には女性たちの代表でありしばしば宗教者でもあった。出産は身体的な過程であると同時に社会的・宗教的な出来事であるときみなされていたのだ。ここから当時の人々の心身未分化的生命観をうかがうことができよう。また産室に集まった女性たちは「ゴシップ(gossip)」と呼ばれ(北本〔1983〕)その語が後世もつようになった語義からも推測されるように活発なコミュニケーションを産褥期の数週間の祝宴にまでわたってくりひろげた。こうした女性たちの緊密な関係は当時の村落の構成原理であった性別(gender)文化の一貫をなしていた⁽⁶⁾。

魔女狩りと教会の出産への介入

このような伝統的出産を変質させる最初の一撃となったのは意外なことに魔女狩りであった(Ehrenreich & English〔1973〕, Donnison〔1982〕など)。魔女狩りは新旧教会の関与のもと16世紀から17世紀初頭をピークにヨーロッパ特に西欧の全域を席卷したが、その際に追及された魔女の罪には、①悪魔との性交などの邪淫にあらわれる女性のセクシュアリティ、②サバト(魔女集会)に集合し組織を作ること、と並んで③健康に影響を与える魔力をもっていること、が含まれる。健康に害を与える術ばかりか治療行為までもが「神に属さない魔術を用いるから」という理由で罪に問われたのだ。薬草の知識をもち民衆のための唯一の医療者として働いていた産婆は「魔女産婆(witch-

midwife)」と呼ばれ、当時最も普及した魔女狩り手引き書である『魔女の槌』においても最も危険かつ数の多い魔女として特筆されている。なかでも人を不妊にしたり流産させたりすること、出産中に秘かに生児を殺すこと、新生児・死産児・へその緒を悪魔に捧げることなどが最大の悪徳とされたが、これらは今日の見れば出生抑制の介助である。一方で生殖に結びつかない快樂本位のセクシュアリティが罪に問われたことを考え合わせれば、性・生殖及び生命に関する新たな心性が出現したと読みとることができよう。

この新たな心性は性と生殖の一致という嚴格な性規範を含むがそればかりではない。より重要なのは生命の管理権が当事者や村落の手を離れ教会に象徴される超越的で普遍主義的な存在のもとへと移行しつつあったことである。魔女狩りにおける産婆排斥の一方で魔術や墮胎を行わないと宣誓した産婆には公的な(教会や行政長官などによる)営業許可が与えられ、産婆は新たな秩序の末端に取り込まれていった。悪魔の子である「化け物」の出産を報告する、頻死の新生児に教会に代わり「緊急洗礼」を施すなどが産婆の業務に新たに加わった(Donnison〔1982〕)。そもそもそれまで許容されていた墮胎や嬰兒殺しを罪とするようになった論理は今日想像される人道主義的配慮とはやや異なり、教会に属すべき靈魂を洗礼を施す前に永遠に救済されない闇の彼方(悪魔の領分)へ追放することになるから、というものであった。教会に帰属する生命を意のままにする権利は親にも村にも許さないということだ。同じ論理はまた子供を教会に帰属させ靈魂を救済する秘蹟である洗礼の低年齢化をももたらした。11~12世紀には幼児がかなり成長してから受洗させていたものが16世紀以降には出生直後になり(Ariès

〔1960 a=1980 : 9 - 10 〕), ついには出産の途中で死亡する子供の魂を救うため長い管を用いて子宮内の胎児に水をかける「胎児洗礼」までも考案されるようになった(Haggard〔1928=1931→1982 : 4 - 5 〕)。

魔女狩りの社会的背景には中世末期から近代初頭にかけて民衆への浸透を強化しようとしたエリート文化(キリスト教文化としばしば重なる)とそれにより変容されつつ悪魔と結託するという象徴的なかたちで抵抗を試みた民衆文化との衝突という社会変動があったとするのが近年の社会史の見解であるが(Chaunu〔1969=1982〕, Muchembled〔1973=1982〕), 村の特殊主義的社会的関係のそれを超えた普遍主義的社会的関係による包摂というそうした社会変動の一貫として生命や出産に関する心性の大きな変化が存在したと考えることができよう。

出産への医師の立ち会い

次なる変化の最も明瞭なメルクマールである出産への医師の立ち会いは16世紀後半のフランスの貴族・上流階層に最初に見出される。異常産の際非常手段を施すために外科医を招いたのが最初だが、1610年代には正常産にも男性医師を招くようになった。この新しい習慣は地理的にはフランスからイギリスそして欧米全域へ、階層的には貴族・富裕層から中産階級そして一般民衆へと拡大していった。最大の転換点は西欧の中産階級が大挙して習慣を変えた18世紀後半で、医師と産婆の職業的対立が激化し男性医師を「男産婆(man-midwife)」の蔑称で呼んで倫理的に非難する社会的反発も湧き起こった(Donnison〔1982〕など)。

各方面からの抵抗にもかかわらず男性医師が永年男子禁制であった産室で職業的に勝利をおさめた理由は出産の社会史における最大の問題

である。第一に予想される解答は近代医学の技術的優越であろうが、実際には当時の医師と産婆の安全性を比較すると同等かむしろ後者の方がやや優れていたようである。産婦本位の「坐産」に替えて介助者本位の「仰臥位産」を導入したことに象徴されるように産婦の身体を客体として扱い積極的に器具や薬物を用いる「おせっかいな助産(meddlesome midwifery)」がかえって災いしたのだ(Leavitt〔1982〕など)。医師の勝利の原因は技術以外に求められるしかない。ではいったいそれは何であったのだろうか。

女性文化の崩壊と近代家族の誕生

ここで医師による助産を受容した人々の側に目を転じてみよう。19世紀中頃の米国のある高名な医師は「何事かをなすべし」というモットーを掲げていた。医師ならば器具や薬品をたくさん用いるはずだという産婦たちの役割期待に應えるのが営業のコツだという意味である(Leavitt〔1982〕)。ここには産婦の側がすすんで近代医学的心性に染まっていった様子が見出せる。身体的安全への要求の飽くことなき昂進、そのために自分の身体をあたかも客体のように飲んで他人任せにする態度、近代医学への実態にそぐわない期待……。客体としての身体偏重の近代医学的生命観が社会全体を覆う心性となったのだ。

受容者側のもうひとつの要因としては伝統的出産を支えていた女性文化の変質・崩壊とそれに代わる新しい社会関係である「近代家族」⁽⁷⁾の創出が挙げられよう。医師が出産を介助するようになってからも産室には従来どおり産婆を含めた産婦の友人たちが立ち会っていた。初期にはどの医師をよぶかという選択からそれぞれの技術の使用の許可までもが女性たちの裁量に委

ねられていた。年代が下がるにつれ産室内での医師と女性たちの勢力関係は次第に逆転していくが、20世紀になって病院分娩が支配的になるまで女性文化の出産への関わりは消滅はしなかった(Leavitt〔1982〕)。しかしひとたび出産以外の場面にも目を向けると女性文化の変容は隠しようもない。かつての女性文化は労働・社交など村の生活の全領域を貫く性別原理に支えられ、相互援助・規範維持など多くの機能と活力を有していた(Segalen〔1980=1983〕など)。それが19世紀には出産などわずかの儀礼を結節点としたインフォーマルな友情関係に矮小化されてしまった(Smith-Rosenberg〔1975〕)。出産にあたっての女性たちの交流は一見不変と見えたが実はそれは女性文化の「最期の砦」あるいは残滓でしかなかったのだ。日常の実質的な相互援助網を失なった家での出産が産婦にとって居心地のよいものであり続けるはずはなかった。だからこそ産婦はしばしばやむをえず病院には行っていった。「もちろんですとも、家で子供を産めたらどんなにいいことか！でも誰が子供を沐浴させるんですか、誰が私に食事を運び寝具を替えてくれるんですか！」という嘆きを残して(Leavitt〔1982〕)。

女性文化に代わって出産の周囲に結晶してきた新しい社会関係が「近代家族」である。19世紀米国の中産階級では出産への夫の立ち会いが流行し医師や識者の賛否両論を巻き起こした。夫たちは「愛する妻の精神的支えになるために」産室には行ってきたと言う(Suitor〔1981〕)。それまで村の性別文化の中に溶融していた「夫婦」が情緒的にも機能的にも密接な単位としてはっきりと析出してきたのだ。またちょうど同じ時期にやはり中産階級を先導として母乳哺育が一般化する(Sussman〔197〕)。つい先日まで授乳は滑稽で不潔で礼儀に反するとして乳母

を雇ったり里子に出したりしていた都市の母親たちが「母性愛」の強さを競って争って母乳を与え始め一日の大半の時間を子供への献身に費やすようになった(Badinter〔1980=1981〕)。相互の強い愛情と家族意識という新たな心性で結ばれた夫-妻-子すなわち「近代家族」という新たな社会関係が誕生し、それ以前にはもっと広い社会関係の中に置かれていた出産や育児をその中に囲い込むようになったのである。

近代国家の出産への介入

医師の出産への立ち会いに示されるような変化を促進した要因としてはもうひとつ近代国家の果たした役割を見逃すことはできない。国家介入は前述の教会の介入を内容的にほとんど継承しその徹底と世俗化を図ったものだった。

18世紀になるとフランスをはじめとするヨーロッパの大陸諸国は争って産婆養成所を設立し医師を教師として近代医学に基く産婆の養成を開始した。そして医師及び新たに養成された産婆のみを正式の助産者として認める助産制度を確立した(Donnison〔1982〕)。これは伝統的産婆の地歩を決定的に脅かす一方で、専門職業化した新種の助産者を国家機構の一端に取り込み言わば「公僕化」しようとするものであった。16,7世紀の教会の介入の際には伝統的産婆を媒介として村落を包摂した普遍主義的社会関係が、この時期には国家として結晶し一切の媒介なしに人々の生命を把握せんと乗り出してきたのだ。同様の志向はやはり教会により創始された墮胎罪が近代国家の法体系内にとり入れられ刑罰を伴う犯罪として初めて実効をもつものとなったことにもあらわれている。この時期には墮胎罪による死刑も相当数執行されたようだ(Manniche〔19 =1982〕)。

注意すべきなのはこうした出産への国家介入

の強さ及び時期は国によりかなりの相違があることである。概して言えば大陸諸国では18世紀から強力な介入が見られ、イギリスではそれが20世紀初頭まで遅れ、米国ではついにはほとんど行なわれなかった(Donnison〔1982〕)。この相違は直接には軍事的必要ならびに重農主義イデオロギーにより鼓舞された人口増強政策の強弱と関連している。政治・経済構造の変動により人間が兵力・労働力として集合的に客体化可能になり計算・計画の対象となったことにこの政策は根拠を置いている(Gélis et al.〔1978〕)が、こうした条件が政策という積極的な形をとるための動機が英米には欠けていたらしい。イギリスは島国で兵士の数がそのまま軍事力につながらなかったこと、米国は移民により十分な人口増加を得られたことなどが個別的理由として挙げられるが、ここではもっと一般的な理由すなわち先進国は自由主義的な国家、後進国は「先進国に追いつけ」という国家目標を掲げて言わば主体化した介入主義的な国家になりやすいという傾向を思い出しておいた方がいいだろう。英米などの先進国ではおそらく国家が積極的に介入するまでもなく人々は村落から解き放たれ出産も新たな形態をとらざるをえなくなったのではないと思われる。

出産の社会史の二局面

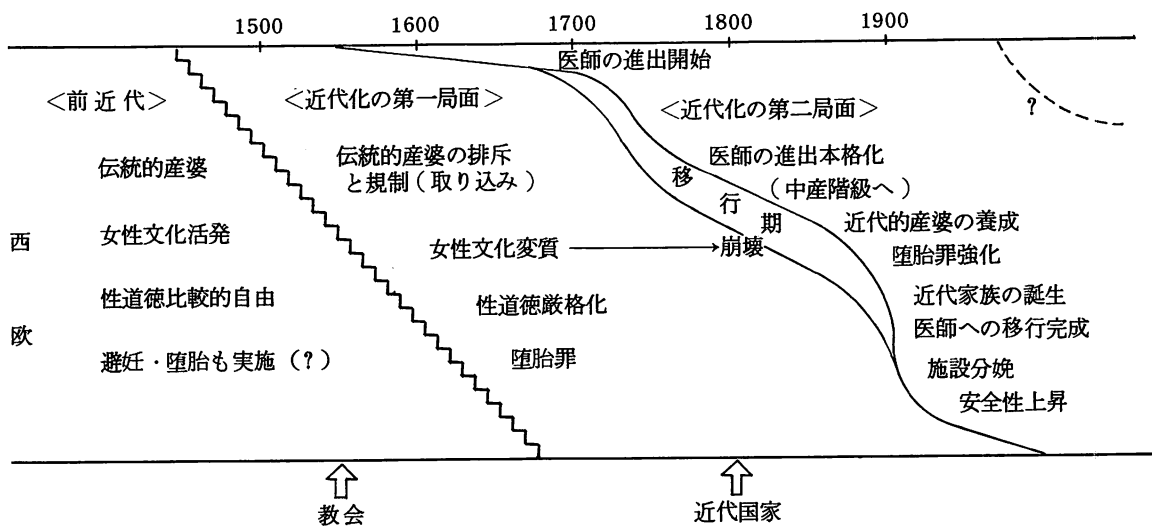
以上の出産の社会史の検討からわれわれは出産をめぐる社会的状況は近代化の過程でやはり二局面からなる変動を経験したと考えることができよう。変動の本質に関わりかつ最も可視的である助産者の変化に着目すれば、16世紀前後に開始される伝統的産婆の排撃(魔女狩り)と教会秩序への取り込みに示されるのが第一の局面、18世紀後半に本格化する伝統的産婆から医師または近代的産婆への交替に示されるの

が第二の局面である。どちらの局面も生命や出産に関する心性及び社会関係の大きな変化を伴っている。ごく簡略にまとめれば第一の局面は教会の出産への介入、性と生殖の一致を命ずる厳格な性道徳、人間の教会への帰属という新たな人間観、教会に象徴される普遍主義的社会関係による村落の社会関係の包摂などを特徴とする。第二の局面は身体を客体視する近代医学的生命観、女性文化の衰退と新たに誕生した近代家族による出産の囲い込み、近代国家の出産への介入、人間の国家への帰属という人間観などを特徴とする。二つの局面は見方によっては(例えばキリスト教の影響力の強さ、性と生殖の一致・不一致など)著しく対照的だが、大局的には後者において全面開花する諸特徴が前者において胚胎された関係にあるようだ。これら二局面の歴史的展開を地域的・階層的ずれを考慮して図示すると図8のようになろう。

われわれの同時代人が「出産の近代化」と聞いて最も常識的に思い浮かべるのはおそらく出産の「医療化」であろうが、それは「近代化」の第二局面の特性であってそれに先行する第一局面を準備段階として必要としたこと、また第二局面においても「医療化」は出産の「家族化」「国家化」とも呼ぶべき社会的側面の変化なしには生じえなかったことも以上の検討から明らかになった。

なお序で触れたように1960～70年代になって自然出産運動、産婆の再評価をはじめとする「医療化」批判の新しい動向が生じているが、それが第三局面を拓くものであるか否かは予断を許さない。本稿ではこうした現代の動向の前提となった第二局面までを論考の対象としたい。

図8 出産の社会史における二つの近代(2) ——心性と社会関係から——



III 二つの近代の社会学的意味

われわれはⅠ、Ⅱにおいて歴史人口学(Ⅰ)及び心性や社会関係に注目する立場(Ⅱ)から近代化過程における出産の社会史的变化を展望してきた。Ⅰ、Ⅱいずれの検討からも期せずして出産の社会史的变化は二つの局面を経てきたことが見出された。図6に図8を重ね合わせ、さらに詳しく地域的・階層的展開についての対応(例えばⅠ、Ⅱいずれにおいても第二局面への転換は地域的にはフランスから階層的には上・中流階層からであったことなど)も考慮すれば、ⅠとⅡは同じ変化を異なる角度から照射したものであるのは明らかだ。しかも「ヨーロッパ的婚姻パターン」による婚姻率抑制型の出生抑制は魔女狩りを契機に強化された厳しい性道徳(性と生殖と婚姻の一致)なしには機能しえず、「家族規模制限」は計画の対象であると同時に主体でもある「家族」の析出なしにはそもそも意味をなさなかったというように、各局面の人口学的諸現象(Ⅰ)はそれぞれの局面の社会学的諸現象(Ⅱ)の複雑な連関の中に緊密に埋め込まれている⁽⁸⁾。「出産」から見れば近代化

過程は二つの局面から成っている、すなわち「二つの近代」が見出されると結論することができよう。

ではこの「二つの近代」は社会学的にはどのような意味をもっているのだろうか。Ⅱでの社会史的知見を特に社会関係に注目して社会学的に再検討してみると、出産に対してそれぞれに重要なしかし異なったしかたでの関わりをもつものとして二種の社会関係が浮かび上がってくる。

その一方は家族、婚姻など出産を直接に担う社会関係である。家族が村落など家族外の間人間関係に対し開放的であるか否か、あるいはそもそも家族なる単位が機能的かつ情緒的に他から截然と区別される明確な集団を作っているか否かなどは出産のあり方に大きな影響を与える。もちろん出産が家族や婚姻によって「担われない」場合があることも社会史的に極めて重要である。社会によっては婚姻外出生力が高さの示したり、あるいはそもそも「婚姻外」「婚姻内」の区別がほとんど問題にならないほど婚姻外出産の禁忌が存在しない場合もある。出産が家族、婚姻などの社会関係といかなる関

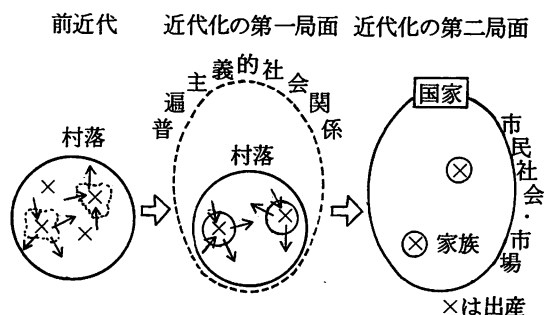
わりをもっているか、また家族や婚姻などそれ自体がどのような性格のものであるかは、その社会における出産の形態を規定する重要な要素なのである。

他方出産には村落、国家などより広範囲の社会関係も関わっている。それらは出産を間接に援助したり規制したりするのだが、一見見逃しがちなこれら広範囲の社会関係の関与の重要性はⅡの出産の社会史で十二分に示されている。こうした社会関係とはもう少し厳密には「出産に関する規範（例えば出産が前述のようないかなる局所的な社会関係により直接に担われるのかなど）を共有し出産によって成員を供給されるもの」と理解すればよかろう。あるいは「全体社会」と言いかえてもよいかもしれない。誕生する人間はある家族や婚姻に属する（属さない場合もある）と同時に社会の成員ともなるのであるから、全体社会が出産に関与するのは極めて本質的なことと言ふべきかもしれない。

このように出産に関わる社会関係は二重性をもっている。社会変動に際しては二重の社会関係が連動しつつ変動しそれに伴って出産という社会現象も変化するのである。

以上のようなモデルに依拠すると出産の社会史における「二つの近代」は次のように整理することができる（図9参照）。

図9 二つの近代の社会学的意味



まず近代的变化の生じる以前の伝統社会における出産は直接には家族や婚姻により担われるのを基本としてはいたが、比較的自由的な性道徳のためそれらの外で生じることも結構許容されていた。また家族や婚姻は今日のような明確な単位を作らず村落内の性別文化の中に溶融していた。村落社会は出産に対して産室に集まる女性たちや民俗宗教という形をとって具体性の高い規範による規制を行ない親密な援助を与えていた。なおこの場合の「全体社会」はいくつかの村落を包含した「地域」であった場合もあるだろう。

近代化の第一局面にはいると村落社会が規範共有の基本的範囲であるのは変わらないものの、まだ漠然としてはいるが村落を超えたより普遍主義的社会関係に支えられた規範（キリスト教に象徴される）が重層して登場し、産婆の排斥と取り込みなどを契機に村落の規範にも変質を加える。性と生殖と婚姻の一致を命ずる厳格な性道徳により出産は婚姻及び家族の中で行なわれるものとなる。一方「非解消」（離婚できない）の婚姻の普及（Ariès〔1982=1982〕）、家父長制の強化により婚姻、家族自体も単位として強化される。ただし社交のネットワークにより村落社会によく融け込んでいるという家族の開放的性質は損われない。

ところが近代化の第二局面にはいると村落社会はほぼ解体し規範共有の範囲は唯一市民社会となる。市民社会の法の護持者は近代国家であるからいきおい国家の出産に対する関与が前面に出て、しばしば規範護持の任務を超えて人口増強政策などを計画的に遂行する主体としてさえ行為する。一方家族は社交のネットワークを失なって「公共性（public sphere）」から明確に分離した「家内性（domestic sphere）」を司る閉鎖的な集団と化し出産をその内に囲い込

む。また家族規模制限などの意図的出生抑制により性が生殖から分離され婚姻の内外を問わず自己増殖を始める。

以上より(少なくとも欧米の)近代化過程における出産をめぐる社会関係の変動は、出産を直接に担う社会関係の限定と規範を共有する社会関係の普遍主義的拡大の二局面にわたる進展であったと結論することができよう。第一局面は後者の社会関係として村落と普遍主義的關係が並存しているなどの点で相対的に独自の段階を作っているが、大局的には変動の過程に位置していた。第二局面における出産の「家族化」と「国家化」はこうした変動の言わば行き着く果てであったのである。

結 近代化過程における家族変動論へ

本稿では社会現象としての「出産」及びその社会史的变化の過程に注目することから、

- (1) (欧米の)近代化過程は「出産」に注目する限り二つの局面からなっていること(図6, 図8)
- (2) (1)の社会学的含意は、「出産」に関わる二重の社会関係のうち「家族、婚姻など出産を直接に担う局所的な社会関係」の限定と「出産に関する規範を共有し出産により成員を供給されるより広範囲の社会関係(全体社会)」の普遍主義的拡大が、近代において、部分的には対照的だが大局的には連続している二段階を経て進展したこと(図9)
- (3) (1)の歴史的展開は、地理的には①北西欧、②南欧及びバルト海岸、③東欧及びロシアという地域によって、階層的には貴族、中産階級、下層の別によってずれを含みつつ進展したこと(図6, 図5, 図8)

などの知見を得ることができた。

われわれは本稿の考察を社会構造における「出産」の位置の理論化をめざすという目的の下に進めてきたのではあるが、その結論は知見(2)に示されたように広い意味での「家族変動」と深く関わっていた。おそらく(1), (3)も含めた本稿の知見は単に「出産」についてのみでなく家族変動及びそれに関連の深い分野一般について十分有効に適用することができるのではなからうか。そうした方向で実証研究を検討し家族変動論を整備していくことは「出産」研究という本研究本来の目的にとっても極めて重要な理論的課題であろう。なお「広い意味での『家族変動』」と言ったのは、本稿では最初から対象を「家族」に限ることをせず「出産」の周囲に結晶する社会関係を見るという方針をとったため家族外の関連現象や定義によっては「家族」の生成や消滅とまで考えるような「家族」の性格の大きな変化(「家族」が集団をなすか、「公共性」と区別された「家内性」を司っているかなど)まで視野におさめえたこと、及びそうした「家族」的領域の変動をつねに全体社会の変動との関連で考察したことを含意している。どちらもいわゆる「家族変動論」としてはやや逸脱かもしれないが、数百年にわたる「家族」の社会史的变化(及びおそらく今日問題となっているような「家族解体」現象)を分析するためにはむしろ必要不可欠な枠組の拡大であると積極的に主張したい。

また本稿で「出産」の社会史的变化あるいは「家族」変動に着目することから見出された「二つの近代」が「近代化」と呼ばれる全体的社会変動の中にどのように位置づけられるかも重要な問題である。Ⅰ, Ⅱの分析から第一局面は16世紀前後に開始し第二局面は18世紀後半から19世紀に進展して20世紀中頃までに完成

したことがわかっているが、これらの年代はちょうど一般的な近代化論における最も重要な変動期すなわち近代の始期（大西洋貿易の成立、宗教改革などに注目した場合の）、産業化期、変質期（「現代」への転換期）にあっている。第二局面は「産業化」を契機とした本格的な「近代」の展開に、第一局面はその準備段階とも言うべき「近代」の始動期に対応していると言って少なくとも概要としては間違いないだろう。「市場化」あるいは「市民社会化」の進展及びそれと裏腹の「個人化」という現象との関連で二局面の社会学的含意を理論的に深めることができるのではないと思われる。また図6に示したような地域による変動過程の相違を重視するなら「近代化」の多系性と各地域間の相互依存性を強調する「世界システム論」の方向への発展の可能性もある。図6の三地域は「世界システム論」(Wallerstein〔1974=1981〕〔1979〕)によると16,7世紀における中核(core)、半辺境(semi-periphery)、辺境(periphery)地域にかなりの程度合致しているようだ。

以上のように本稿における「出産」の社会史的考察は家族変動論及びそれを重要な一分野として含む近代化理論への発展の道を拓くものでもあった。こうした諸問題についての本格的展開は非欧米圏への論及と合わせて稿をあらためて行ないたい。

注

- (1) 「心性(mentalité)」とは社会史の鍵概念で「たとえ社会とはいわずとも、少なくとも集団の全員に共通な思考・行動様式である。」(G.Duby)「集合心性」なども訳す。「社会的なるもの(le fait social)」であり構造をもつことをその特色とし、社会学的概念に翻訳すればデュルケ

ームの「集合意識(la conscience collective)」に近いと考えられる。なおAriès〔1960a=1980〕の翻訳では「社会的な意識のあり方」と訳されている。

- (2) 社会史は伝統的な実証主義歴史学へのアンチテーゼとして提唱された歴史学の新しい潮流で、①日常生活への注目、②長期波動(la longue durée)においてしか変動しない構造への注目、③歴史的社会科学(historical social science)への志向などをその特色とする。
- (3) いわゆる「近代化論」の一国を単位とした同型的社会変動としての「近代化」理解に対し「従属(dependency)理論」「世界システム(world-system)論」からの有力な批判が提出されている今日、「世界社会」における多系性を考慮せずに「近代化」を論じるのはいささか問題である。
- (4) ここでの「社会関係」概念は通常は社会学的用法よりゆるく、社会史の「心性」と並ぶ鍵概念である“sociabilité”(社交性、交際関係、人的結合関係、社会的結合関係)が意味するようなより流動的で具体的・可視的な人と人との交流も含むものとして用いたい。
- (5) 近年の社会史では、伝統社会においては家族(ménage)より性別(gender)の方が重要で労働も社交も家族を超えて村落内に拡がる性別のネットワークにより担われていたとする見解が有力である。男性と女性は異質ではあるが対等で相互補完的であった。こうした見解は家父長制家族を重視し女性の男性に対する従属を強調する従来の伝統社会観を覆すものである。Segalen〔1980=1983〕, Verdier〔1979〕, Illich〔1981=1983〕参照。
- (6) ヨーロッパの伝統社会においては出産を不浄なものとして「忌む」という日本などの民俗においてなじみ深い心性は見られない。
- (7) 「近代家族(modern family)」とは家族史の

重要概念で①友愛結婚の出現, ②子供への関心の増大, ③家族規模の縮小(産児制限の普及)などをそのメルクマールとする。Shorter〔1975〕, Degler〔1980〕, Stone〔1977〕など参照。なお家族形態に関する「核家族化」と家族の性質に関する「近代家族化」とは異なる現象であり, 前者は近代化の第一局面に後者は近代化の第二局面にそれぞれ対応することに注意。

(8) Hajnal〔1982〕はかつて自分の提唱した「ヨーロッパ的婚姻パターン」なる人口学的概念は「北西欧的世帯形成システム(Northwest household formation system)」なる社会制度及び社会規範の複合体(①晩婚・稀婚, ②新婚夫婦は新世帯をかまえる核家族制度, ③未婚者の奉公制度など)の一貫をなすものだとする方向に近年論考を発展させてきている。

文献

- Ariès, Philippe 1960a L'Enfant et la vie familiale sous l'ancien régime, Seuil. = 1980 杉山光信他訳, 『<子供>の誕生』, みすず書房。
- Ariès, Philippe 1960b "Interprétation pour une histoire des mentalités", Travaux et Documents Cahier, 35: 311-328. = 1983 林康廣他訳, 「避妊の心性史」, 「産育と教育の社会史」編集委員会(編), 『学校のない社会 学校のある社会』, 新評論。
- Ariès, Philippe 1982 "Le mariage indissoluble", Communication, 35. = 1982 杉山恵美子訳, 「婚姻制度の歴史」, 『現代思想』10-14:100-116。
- Badinter, Elisabeth 1980 L'amour en plus, Flammarion. = 1981 鈴木晶訳, 『プラスラブ』, サンリオ。
- Chaunu, Pierre 1969 "Sur la fin des sorciers au XVII^e siècle", Annales E. S. C. : 895-911. = 1982 長谷川輝夫訳, 「十七世紀における魔術使いの終焉」, 二宮宏之他(編)『魔女とシャリヴァリ』, 新評論。
- Coale, Ansley J. 1969 "the Decline of Fertility in Europe from the French Revolution to World War II", Berman, S. J. et al (eds.) Fertility and Family Planning: A World View: 3-24, Univ. of Michigan Press.
- Coale, Ansley J. 1973 "The Demographic Transition", International Population Conference Liège 1973, 1: 53-72, IUSSP.
- Degler, Carl N. 1980 At Odds - Women and the Family in America from the Revolution to the Present, Oxford U. P.
- Donnison, Jean 1977 Midwives and Medical Men, Heinemann
- Donnison, Jean 1982 "Midwives Past and Present: Myth and Reality" (unpublished)
- Ehrenreich, Barbara & English, Deidre 1973 Witches, Midwives and

- Nurses: A History of Women Healers, Feminist Press.
- Gautier, Etienne & Henry, Louis 1958 "La population de Crulai, paroisse normande", Travaux et Documents Cahier, 33: 118-122.
- Gélis, J. ; Laget, M. ; Morel, M. F. 1978 Entrer dans la vie - Naissance et enfances dans la France traditionnelle, Gallimard.
- Haggard, Haward W. 1928 Devils, Drugs and Doctors, Harper. = 1931 巴陵宣祐訳, 『古代医術と分娩考』, 武侠社→1982 エンタプライズ。
- Hajnal, John 1965 "European Marriage Pattern in Perspective", Glass, D. V. et al (eds.) Population in History: 101-143.
- Hajnal, John 1982 "Two Kinds of Preindustrial Household Formation System", Population and Development Review, 8-3: 449-494.
- Henry, Louis 1961 "Some Data on Natural Fertility", Eugenics Quarterly, 8-2: 81-91.)
- Henry, Louis 1972 Démographie - analyse et modèles, Société encyclopédique universelle.
- Hollingsworth, T. H. 1964 "The Demography of the British Peerage", Population Studies, 18-2 (Supplement).
- Illich, Ivan 1981 "Vernacular Gender". = 1983 丸山勝訳, 「バナキュラー・ジェンダー」, 山本哲士(編)『経済セックスとジェンダー』, 新評論。
- INED (Institute national d'études démographiques) 1960 "La prévention des naissances dans la famille - ses origines dans les temps modernes", Travaux et Documents Cahier, 35
- 北本 正章 1983 「農村共同体の子どもから産業都市社会の子どもへ」, 宮沢康人(編)『世界の子どもの歴史』第6巻: 14-82, 第一法規。
- Knodel, John 1978 "Natural Fertility in Pre-industrial Germany", Population Studies, 32-3: 481-510.
- Laget, Mireille 1982a "The Practices of Midwives and Obstetricians in France during the Eighteenth Century" (unpublished).
- Laget, Mireille 1982b Naissances, L'accouchement avant l'âge de la clinique, Seuil.
- Leavitt, Judith W. 1982 "Science Enters the Birthing Room: Obstetrics in America since the Eighteenth Century" (unpublished).
- Manniche, Erik 19 "Induced Abortion in Denmark: 1200-1979". = 1982 伊東敬文訳, 「デンマークにおける人工妊娠中絶の歴史: 1200年~1979年」, 『助産婦雑誌』 36-10。
- Muchembled, Robert 1973 "Sorcellerie, culture populaire et christianisme)

- an XVI^e siècle", Annales E. S. C. : 264-284. = 1982 相良匡俊訳, 「十六世紀における魔術, 民衆文化, キリスト教」, 二宮宏之他(編)『魔女とシャリヴァリ』, 新評論。
- Segalen, Martine 1980 Mari et femme dans la société paysanne, Flammarion.
= 1983 片岡幸彦監訳, 『妻と夫の社会史』, 新評論。
- Shorter, Edward 1975 The Making of the Modern Family, Basic Books.
- Smith, Richard M. 1979 "Some reflections on the evidence for the origins of the 'European marriage pattern' in England", Harris, C. (ed.) The Sociology of the Family, Keele.
- Smith-Rosenberg, Carroll 1975 "The Female World of Love and Ritual: Relations between Women in Nineteenth-Century America", Signs, 1-1: 1-29.
- Speert, Harold 1973 Iconographia Gyniatrix - A Pictorial History of Gynecology and Obstetrics, Davis. = 1982 石原力訳, 『図説——産婦人科学の歴史』, エンタプライズ。
- Stone, Lawrence 1977 The Family, Sex and Marriage in England: 1500-1800, Weidenfeld & Nicolson.
- Suitor, Jill 1981 "Husbands' Participation in Childbirth: A Nineteenth-Century Phenomenon", Jour. of Family History.
- Sussman, George D. 19 "The End of the Wet-Nursing Business in France, 1874-1914", Jour. of Family History.
- Verdier, Yvonne 1979 Façons de dire, façons de faire, Gallimard.
- van de Walle, Etienne 1974 The Female Population of France in the Nineteenth Century: A Reconstruction of 82 Departments, Princeton U. P.
- Wallerstein, Immanuel 1974 The Modern World-System, Academic Press.
= 1981 川北稔訳, 『近代世界システム I, II』, 岩波書店。
- Wallerstein, Immanuel 1979 The Capitalist World-Economy, Cambridge U. P.
- Wrigley, Anthony 1981 Population and History, Weidenfeld & Nicolson.
= 1982 速水融訳, 『人口と歴史』, 筑摩書房。

(おちあい えみこ)